
家庭教師リボーン 未来編～IF～

ハグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師リボーン 未来編ⅠFⅠ

【Nコード】

N5757P

【作者名】

ハグ

【あらすじ】

もしかしたら、有り得たかもしれないストーリー……。

もしも大空が墜落したら……？

そして、その時の周囲の人々はどのような行動に移るのか……？

(前書き)

家庭教師REBRONの二次創作小説です。死ネタと残酷表現が嫌な方は決して見ないで下さい！

舞台はイタリアだと考えて下さると嬉しいです。

世界中の財でも生命でも美しい物でも価値がある物でも手に入れてみせよう

なのに

どうして、自分達を置いて逝く？

赦すものか、自分達の心を奪っておきながら！！

世界の果てまでも、地獄の灼熱までも、

彼と共に在れるのならば、何処までも喜んで逝こう

彼は、唯一……呪われた赤子達を、醜い闇の獣達を、受け入れてくれた大空なのだから！！

※霧と大空の最後の会話

「綱吉君、僕の声が聞こえますか？返事はしなくても良いですから、答えて下さい」

（……うん……骸、だよね？）

「ええ、貴方だけの霧ですよ。今の状況は理解できていますか？」

（……今の、状況……？）

（ああ……そっか、オレは撃たれたんだっけ……リボーンに怒られるの、嫌だな……）

ゴボリ、と薄い唇から鮮血が溢れ、白いワイシャツを真紅に染めていく。

綱吉の視界一杯に骸の顔が映り、その珍しい表情に思わず綱吉は小さく笑った。

「何を笑っているんですか、貴方は。分かっていますか？今の貴方が置かれている状況を」

（……分かっているよ、オレは死ぬんだろ？どうみても、助からない）

骸の表情がぐしゃりと歪み、歯を喰いしぼるような苦痛に満ちた表情になっていく。

「……馬鹿ですね、本当に……何で、何も言わないんですか」

（それは死が怖くないのかっていう意味？怖いよ、マフィアに入っただけでもね）

その暗い場に不釣り合いな微笑が綱吉の表情に宿る。

（だけど……超直感がオレに教えてくれるんだ）

そう、綱吉は静かに感じ取っていた。

（骸……）

一時的な別離の訪れと、もう1つの予感を。

(……骸……お前に1つだけ頼みたい事があるんだ)

どうして愛する大空の言葉を見殺しできるだろうか。

静かに苦痛に満ちた表情から諦めと慈しみに満ちた表情へ変えた骸が綱吉の血濡れた手の甲に口づけた。

「……ええ、誓いましょう。貴方の霧として、貴方の名に懸けて、望みを叶えて差し上げましょう」

※怒り狂う者々

「????????????????アイツを殺した奴らの正体が割れた」
死神の通り名に相応しい程の殺気を漲らせたりボーンが淡々と無感情に告げる。

「ソーシャル・チルンバーの仕業だ……狙いは、大空の墜落と贖される膨大な利益らしいぞ?」

ピリッと室内に殺気が溢れ出し、その雰囲気によりボーンはボルサリノで目元を隠しながらも暗く嗤った。

それで良い、と言うかのように。

「ああ、言い忘れたな……キャツバローネとトマゾも加わるだよ」
長く友好で同盟関係に在るファミリーと、同級生という関係で長年

の確執にピリオドを打ち、新たに友好関係を結んだファミリーの名前に誰もが当然だと言わんばかりの表情を浮かべる。

「????????????????さて、始めるぞ……俺達の、大空を墜落させた報いを思い知らせてやれ!!」

ボンゴレ?世と呼ばれた、恐れられながらも愛され、血に濡れた道に進んでも尚、心優しさと慈悲を捨てることがなかった青年。

初代の再来とまで謳われた、世界を統べる王に相応しいとまで讃えられた琥珀の大空。

その彼は、もう何処にも居ない。

「ねえ、赤ん坊。僕らの好きなように殺しても良いのかい?」

激情で漆黒の双眸を爛々とさせた雲雀が問うた。

「構わねーが、苦痛と絶望を味わせることも忘れんじゃねーぞ?ヒバリ」

それぐらい当然でしょ、と雲雀が薄く嗤い、流れるような仕草で立ち上がる。

誰も雲雀の行動に口を出す者はいない。

「……行動は自由なんですネ、連絡も必要ですか?」

酷く冷え切ったマスカットの瞳でランボが静かに退出していく雲雀を見送りながら、素気なくリボーンに確認した。

「いや、連絡の必要はない。俺から指示を幾つか出していくがな」

※雲の想い

醜い草食動物だね……いや、蛆虫と呼ぶべきかな、と雲雀は内心で舌打ちする。

大興奮しきった声色で媚びて来る、ソーシャル・チルンバーのボスだという中年の男はとてもファミリーを預かる器には見えない。

そう言えば、と雲雀は男の言葉を無視しながらも思い出した。

沢田綱吉も最初はボスの器を持っているようには見えない程の臆病な小動物だったが、中学を卒業する頃に吹っ切れたのだろう。

それからの沢田綱吉は赤ん坊、リボンでさえ驚く程、巨大組織を率いるのに相応しい風格と実力をみると身に付けていって。

気が付けば、ファミリーのボスの癖に優しくて強い彼なら膝を折ってやっても良いか、とまで思うようになっていた。

改めて、再び雲雀が意識を現実に戻すと、眼前の中年の男に何らかの変化がなく、相変わらず媚びることで夢中らしい。

本当に、この男は何も気付かないのか。

雲雀や骸だけに限らず、ボンゴレは一癖も強い連中ばかりで、最初から個性が強すぎる連中を纏め上げて従わせる存在など1人しか居

ないと言うのに。

確かに、雲雀はボンゴレの中でも懸念される程に気紛れが激しい人間だ。

だが、その自分でさえ従わせたのが沢田綱吉という男の魅力であり、強みでもあった。

（うん……決めた、赤ん坊が動いたら問答無用で噛み殺す。ああ、楽には死なせないからね）

男に見られないよう、雲雀は遠くもなく近いうちに行われるだろう
粛清を愉しみにしよう、と暗く嗤う。

（赦してやるものか、あの子を殺してくれたんだからね……ねえ、
蛆虫？）

雲は嗤う、浅ましくも大空を墜落させて膨大な利益を手に入れよう
とする愚かなる大罪人へといずれ与えるであろう制裁の言葉を囁く
ように。

※霧の想い

クハハ、と骸は気が狂ったように嗤う。

「愚かなことだ……あの子はボンゴレ？世ですよ？しかも、初代の
再来とまで謳われたボスを殺して利益を得られる訳がないでしょう
に！」

ぐあああつと断末魔の悲鳴が響き渡る中で、骸だけが静かに言葉を紡いでいた。

その光景は酷く異常なもので、もしも誰かが見ていたならば、骸を狂人だと思うに違いないと言わしめる程だった。

「ああ、楽には死なせんよ？あの子が最期の一瞬まで感じただろう苦痛を味わいなさい」

骸にとって、沢田綱吉は“光”だった。

誰にも穢されることのない、絶対的な存在。

かつて敵対し、何かと現実を甘く見る沢田綱吉に苛々しつつも、無意識のうちに骸は心の奥で恐れたのかも知れない。

マフィアという闇を知らない、無垢な子供。

その無垢な魂をどす黒く闇に染めてしまうことに。

彼の純粹さに救われていた、と気付いたのは彼が初めて人を殺した時。

結局、沢田綱吉はマフィアの闇に浸っていても決して優しさを喪わなかった……それどころか何も変わらないまま自分達を暖かく包容してくれた。

「ねえ、分かりますか。あの時の、歓喜がどれだけのものだったかを」

だからこそ、骸は襲名式の際に1つの誓いを立て、彼も信頼という形で返してくれたのだ。

「あの子は、生涯だけでなく魂も何もかも捧げると誓った僕に、よりもよって遺伝子をくれたんですよ。限りなく悪用されかねない、彼の遺伝子を、この僕にね!!」

びゅっと首の動脈から鮮血が吹き出した構成員に、骸が嘲笑ってみせる。

霧は嘲笑う、無垢で暖かき大空を撃ち殺した醜く愚かなる人間に目覚めることも逃れることも出来ないであろう夢幻の地獄へと誘うように。

※雷の想い

「……ランボ。アンタ、ちゃんと寝てないでしょ？ツナさんが怒るわよ」

幼馴染の少女が気遣わしげにランボの背中を見つめながらも言い切る。

「ツナは……もう居ないのに、眠れる訳がない……イーピンもフウ太さんも皆も同じだろ？」

彼が最期まで流していただろう綺麗な真紅よりも、遥かに薄汚く黒赤い紅に染まった掌に瞳を向けつつも、ランボが指摘する。

「そうよ……誰も眠れやしないわ、だってツナさんが??????」

????もう居ないんだもの……!」

うん、とイーピンの悲鳴じみた言葉にランボは濁ったマスカットの瞳で頷いた。

此処には居ないフウ太も、ランボもイーピンも、幼いうちから沢田綱吉という存在が傍に在ることを当たり前のように感じていた。

それはイタリヤに渡り、彼がドン・ボンゴレの座を襲名した後も何一つ変わらなかった。

ただ変わったのは、籍……綿密に言えば、アルコバレーノを除く年少組が、沢田綱吉の実家の養子に入り、正式に彼を義兄と呼べる、義弟妹になったことだ。

そして、イーピンは義兄となった彼の勧めもあって暗殺家を止めた。

勿論、ランボも彼女が暗殺家を続けることは反対だったので、彼の手助けをしたのだけだ。

「どうしてツナさんが殺されないといけないの？ツナさんは優しくて、他人を傷付けるような人じゃなかったのに……!!」

「誰もが聞きたがってるよ、その理由を。でも、リボーンが教えてくれたんだ……ツナは何もしていないのに、利益の為に殺されたんだって」

ランボが告げた言葉に、イーピンが愕然とした表情で呟く。

「何、それ……そんなことで、私達は唯一の“義兄さん”を喪

わなければいけないの!？」

「……だからこそ、『僕達』が動き……『彼ら』も動き始めたんだよ、イーピン」

雷は静かに弔う、唯一の義兄でもあり、尊い大空を奪ったファミリ
ーの人間の血を流すことで己の中で暴れるであろう激情を清めるよ
うに。

※晴の想い

「……俺は極限に後悔して止まぬことが、1つだけあってな」

かつて沢田綱吉という少年を守る為だけに振るおうと決めていた拳
を、制裁の為に振るう。

次々と血を吐きながらも苦痛から逃れられない構成員が悶える中で、
了平が言葉を続けた。

「お前達のような人間達から、沢田を守ってやれなかったことを、
俺達は極限に後悔している」

苦しかったに違いない、と了平は静かに瞼を閉じる。

彼は中学の時から、極端に他人が傷付くことを嫌っていた。

それを知らない人間は少なくともボンゴレの人間で1人も居ない…
…それ程に優しく、大空のように暖かく大きい存在だったのだ。

ソー……何とやらのファミリーは、その彼の優しさを逆手に取り、卑怯な方法で彼を殺した。

どうして赦せようか。

どうして認められようか。

ましてや彼は了平の家族だけに限らず、並盛町に住む人間がマフィアに巻き込まれないよう、密かに守っていてくれた。

「お前達は真っ向に対抗もせず、卑劣な方法で沢田を殺した……極限に赦せん!!」

奇跡的に、沢田が身を挺して庇った少女は無傷で保護されたが……精神的に不安定で、沢田の死は自分の所為だと自ら責める日々だという。

「沢田だけでなく、一般人の少女の人生も滅茶苦茶にしおって!!」
彼が知ったら、間違いなく悲しむだろう。

「極限に思い知るが良い、俺達の負の感情というものを!!」

晴は吼える、他人に優しさを向ける大空へ卑怯な方法で死を与え、一般人も巻き込んだことを赦さぬであろう彼の代わりに裁くように。

※嵐の想い

「お前なら、きっと暴れ回るとばかり思っていたぜ……スモークン

グ・ボム」

白衣を脱ぎ棄てたシャルの珍しすぎる姿を、獄寺は一瞥して静かにノートパソコンを開く。

出来ることならば、獄寺も他のメンバーのように、昔のように暴れ回りたいかった。

だが、ボンゴレ？世の信頼が篤いと謳われ、彼の右腕を担う片翼として、常に冷静沈着であることを求められてからは感情に委ねることが出来なくなったのだ。

「……俺まで出て行ったら、誰がボンゴレを率いる？クソ、どうつも出て行きやがって……！」

愚痴を零しつつも、獄寺のキーボードを叩く指は止まらない。

「そーかい、お疲れさん。さーて、そろそろ俺も動くべきかねえー」
シャルの一言に獄寺は器用に片方の眉を吊り上げ、パソコンの液晶面から視線を外し、昔の師に視線だけで問い掛ける。

その真意に気付いたのだろう、シャルが軽薄に嗤った。

「ヤローの趣味はねえが、あのボンゴレ坊主だけは気に入っていたんでな……トーゼンだろ？」

その気持ちは解らなくもないな、と獄寺が再びパソコンに視線を向けながらも思う。

どのファミリーからも「子供だから」と拒まれ続けたことで、最も荒んでいた頃に沢田綱吉という人間だけが最初のファミリーとして受け入れてくれた。

その時に感じた歓喜は、とても言葉では言い尽くせない。

そんな恩人とも言うべき存在が奪われたのだ、誰であろうと赦せる訳がない。

「……なら、アンタのサポートも請け負ってやる。どうせ俺は動けねえからな」

誰もが動いている中で、ボンゴレを離れる訳にはいかねえんだ、と獄寺が小さく呟いた。

かつて激情のままに動いていた頃とは事情が変わってしまったのだから。

「安心しろよ、お前も動けるようにしてやる」

「その言葉、忘れるんじゃないぞ」

嵐は息を潜める、かつての己を救い出した、恩義がありし大空の、弔い抗戦に出て行く人間が出すであろう合図で暴れ回る、その時を待つように。

※雨の想い

ぎゃああああ！！と甲高い悲鳴が響き渡り、表通りで何人か黒服の

男達が血を流しながらも悶え苦しむ。

その中心に佇む青年が時雨金時を竹刀に戻し、悶え苦しむ人間達に見暮れもせず、シンプルな携帯電話をポケットから取り出した。

「よっ、小僧じゃねーか。どうかしたんか？確か、例のヤツを蜂の巣にするって言ったよな？」

『今、蜂の巣にしてるぞ。それはどうでも良い、雲雀と交流しろ。ソーシャル・チルンバーの他にもアイツの暗殺計画に関わったファミリーが5つも判ったんでな』

ピリッと肌が痺れるような、山本の本気の殺気が表通りに漲る。

「……で、俺は何をすれば良いんだ？小僧」

『コロネロとラル、マーモンも動く。スカルは獄寺とボンゴレのサポート役だ……残り4つはトマゾ、ヴァリアー、キャッパローネの3大勢力が片を付ける。お前は雲雀とスパイしてろ』

誰もが動く、沢田綱吉という1人の人間の為だけに。

山本にとっても彼は唯一のヒーロー的な存在だった。

「ん、分かったのなー。なあ……小僧？何で、ツナが殺されないといけなかったんかな……？」

『……そんなの、俺が聞きてえよ。アイツは俺の最高傑作だったんだからな』

考える必要はないか、と山本は無言で携帯電話を閉じる。

例え、何者であろうとも。

「ツナ、ツナは嫌がると思うけどさ……俺達にとってはツナだけが大切なんだ。だから、今回だけは見逃して欲しいのな！」

これだけは、もう譲れない……ツナに止められても、泣かれても、だ。

雨は流す、かつて身体を張ってまで心身を救ってくれた大空を悼み、大空という名前の世界を壊したであろう愚かな人間を憎む、紅い涙のように。

※家庭教師の想い

ピッと軽やかに携帯電話のPWRボタンを押し、ボルサリーノの奥から漆黒の瞳で瀕死状態の男を冷たく見下ろす。

「楽に死ねると思うなよ、このクソが。俺の磨き上げた最高傑作を殺してくれたんだ、覚悟は出来てるんだろ？」

ほぼ同時に、リボーンは思う。

結局、ダメツナの性格だけは矯正できなかったな、と。

沢田綱吉という子供は最初から甘い考え方を持っていて、どんな激戦を体験しても尚、他人に示す優しさを喪わなかった。

まるで、日溜まりのようだ、と言ったのは誰だったか。

「オメーらのような馬鹿は見たことがねえな……よりもよって、アルコバレーノが膝を折ったアイツを殺すなんぞ、な」

赦すものか、とりボーンは更に男を甚振るかのように、銃弾を放った部分を足で踏み付ける。

悲痛な悲鳴が響き渡り、鬱陶しそうにリボーンが眉を顰めた。

ドン・キャツバローネのディーノを育て上げたこともリボーンの名声を高めたが、沢田綱吉と比べると些細なものでしかない。

ボンゴレ？世、初代の再来、空の変革者、世界の王、ボンゴレの帝王……それ程、リボーンの予想以上に彼は王たる器の持ち主だったのだ。

「教えてやる、最期の餞に。アイツは……ツナは、アルコバレーノの王だ。俺達だけの大空、それが沢田綱吉という人間なんだぞ」

呪われた虹、その俺達が認め、自ら膝を折ることを良しとした、小さな貝の王。

絶望の色に彩られた表情を浮かべた男に、リボーンは躊躇なく引き金を引く。

黄のアルコバレーノは謳う、喪われし最高傑作と呼びし大空の偉大さを、復讐の始まりとなすであろう暗殺家に、絶望と終焉を告げるように。

※壊れゆく陰謀

何故だ、とドン・ソーシャル・チルンバーが醜く部下に八つ当たりの悪態を投げた。

「あーあ、本当にツナと同じ人間とは思えねえのな。そう思うだろう、雲雀もさ」

「ちょっと……綱吉と蛆虫と一緒に括らないでくれる？あの子は僕の唯一の主なんだから」

山本の問いに素気なく答えた雲雀が立ち去ろうとした瞬間。

「くそ……！！漸く邪魔な？世を片づけられたと言うのに……忌々しい東洋人の男娼がッ！！」

お前如きが、何も出来ない愚か者が、あの美しく高潔な青年を辱めるのか、馬鹿にするのか！！

「……ツナは自分の力でボンゴレを手に入れたのにな。俺達は、手足纏いになっちまった」

「当たり前でしょ、あの子は高校で僕達を負かす程の実力を付けたからね。そんなことよりも盗聴器を赤ん坊か跳ね馬に渡してきなよ」

そう言い捨て、さっさと専用部屋に向かった雲雀を見送り、山本は冷たく殺気を込めた視線でドン・ソーシャル・チルンバーを睨み付け、サッと踵を返す。

その盗聴器の内容は、ボンゴレ？世という青年の本質を知り、また快く思い、盲目的に慕った人間の怒りを煽った。

赦さない、と呟いたのは誰だったか。

最早、これ以上は我慢ならないと怒り狂う人間が余りにも多すぎる。

「なあ、リボーン？もうキャツバローネは動くぜ……ツナは眨められて良い存在じゃない」

ディノの怒りを押し殺した声色に、彼の元家庭教師が静かに判断を下した。

「獄寺、スカル、ボンゴレと同盟国に指令を伝えろ。大空を撃ち落とした報いを、とな」

マフィア界の勢力を占めるファミリーがボンゴレを中心に揺れ震える、唯一の大空を、昏闇の中でも輝き続ける琥珀の光を奪ったであろう愚か者の殲滅の為だけに！

※無知であらうとする者

何故?????????こんなことに、とドン・ソーシャル・チルンバーは只管、耐えがたい恐怖と疑問で震えていた。

まだ気付いていなかったのだ、己がどんなに重く、赦される筈もない大罪を犯し、第3勢力と謳われるマフィア達の怒りを買ってしまったことを。

それ程に、彼は東洋から来訪した、沢田綱吉というボンゴレ？世を継いだ青年の器を甘く見ていたのだ！

東洋人で弱々しいという第1印象が仇となった。

本当に弱々しい青年であるならば、どうして歴代優秀と謳われる程の数々の伝説を築くことが出来ようか。

最凶と恐れられる暗殺特殊部隊・ヴァリアーと後継者争いを行い、過酷な激戦を経ても、勝ち残った人間こそが紛れもなき沢田綱吉であるにも関わらず。

数多くの業績を噂だと侮り、己ならば沢田綱吉よりも上手くボンゴレを続けることが出来ると愚かにもドン・ソーシャル・チルンバーは思い込んでしまったのだ。

「そ、そうだ……ヒバリとヤマモトに守ってもらえば……っ！！」

名案だとばかりに、いそいそとボンゴレの中でも最強の名を冠する守護者であった2人の元へ赴こうとした彼は何一つも知らない。

最強の名を冠する守護者が、全員とも、このソーシャル・チルンバー本部に乗り込み、終焉を齎そうとしていることに。

ただドン・ソーシャル・チルンバーは忌々しそうにボンゴレ？世を貶め、己の保身だけを考え、掌中に残された“儚い希望”に縋り付く。

その希望が、最初から虚無であったことも知らずに。

「あんな東洋人に出来て、この私が出来ないことなど……ない!!」
世界の帝王を撃ち落とした大罪人は無知で在り続ける、本来ならば何を差し置いても償うべきであろう、赦されざる大罪から目を背けるように。

※雲と霧の会話

「……へえ、此処まで馬鹿とは思わなかったよ。君達も、そう思わないかい？」

雲雀が嘲笑するように、通信機の向こう側にいるだろう『同士』に問い掛けてみた。

『今更のことですね。綱吉君を殺してくれたんです、愚か者と言わずして何と言いますか？』

血肉を潰す音に混じって、いっそ無感情とも言える程に冷たい、骸の声色が雲雀の耳に届く。

慈悲など、最初から与えてやる気はない。

「ふん……赤ん坊も来るの？君達の暴れ回る音は聞こえるんだけど、赤ん坊のだけはないよね」

『ああ、遅れて来るそうですよ。最期の際で、綱吉君に頼まれた内容を彼に伝えましたから』

クフフ、と嗤う骸の言葉に雲雀が険しい表情を浮かべた。

ボンゴレや彼らの大空を知る人間も知っている、六道骸という青年が大空の死を見届け、彼が最期に願った内容を聞いた唯一の生き証人だということを。

「いい加減、教えてくれない？ 綱吉が最期に何を願ったのかを」

『クフフ、帰ったら嫌でも判りますよ……彼が何を望み、欲したかを……ね』

ち、と雲雀が舌打ちをし、躊躇なく通信機の電源を落とす。

「……彼は、『あの子』になったんですよ……彼自身の『願い』の為だけに。それは、僕の力を無くして不可能だったという事実に過ぎない」

電波が途切れた通信機を無造作にスーツのポケットに入れ、骸は静かに、三叉槍を握り締めて言葉を紡ぐ。

『……骸……お前に1つだけ頼みたい事があるんだ』

「????????????????ええ、分かっていますよ。僕は……ただ貴方に従いましょう、そして貴方の為ならば、あの地獄へも喜んで堕ちて差し上げましょう」

それだけが骸が動く理由となるのだ。

※絶望の足音

カツン、と漆黒の少年が珍しくも足音を立て、ドン・ソーシャル・チルンバーへと死期を宣告するかのような錯覚感を齎された。

「あ、あ……ま、さか……ッ……ど、どうして、もう喪われた筈のアルコバレーノが!？」

悲鳴じみた問い掛けの声に、冷ややかに答えたのは雷の守護者を冠する年少のヒットマン。

その他の顔触れは沈黙を保ったままだ。

「どうして?何を言っていますか、アルコバレーノは最初から誰一人も喪われていませんよ」

ただ沢田綱吉が、彼が、ボンゴレ?世が?????????ただ彼らに望まなかったただだ。

普通の子供として、安穩に満ち足りた生活を送って欲しい……それが、唯一の存在である彼がアルコバレーノに望み、願ったこと。

「今は存在を消されていますが、少なくとも全員の生存は確認しています。彼が、ツナだけがアルコバレーノ全員の現在地を把握し、命令を下せる人だった」

ドン・ソーシャル・チルンバーの双眸が隠し切れない程の驚愕で見開かれる。

「その通りだぞ……アイツが貴様に殺されたと聞くまで、俺達はアイツの望む通りに何一つもマフィアに関わらないでいたんだ」

あの日?????????生まれ初めて、リボーン達は、呪われたアルコバレーノ達は、後悔した。

何故、沢田綱吉の傍を離れてしまったのか、と。

居住地はボンゴレであり、沢田綱吉の傍だったが、彼が望むままにアルコバレーノ達は武器を手に握ることがなかった。

「腕を落とさない為に、鍛錬で武器を握ることはあったが、基本的に殺しはやらなかった」

愛しい大空に良かれと思ったことが、彼を死に追いやってしまった。

「だから、赦せねえんだよ。アイツを撃ち殺したオメーらも……アイツの傍で、唯一の存在をこの掌で守ってやれなかった俺自身も、だ!!」

死神の銃弾は決してドン・ソーシャル・チルンバーを楽にはさせなかった。

ただ苦痛に身を悶える男に、数々の武器が振り下ろされる――――

※終焉と……

復讐を終え、ソーシャル・チルンバーに完全なる終焉を与えた今、何処か虚しさが彼らの心を支配する。

当然だろう……復讐を果たしても、死した人間は永久に戻らない。

しかし、その雰囲気破壊するかのように、骸とリボーンが穏やかに会話を始めた。

「アルコバレーノ、もう『あの子』に会ったんでしょう。変わっていませんでしたか？」

「呆れる程に変わってねえな……『あのガキ』の人格、素質……“以前”と同じまんまだぞ」

何の話だと訝る顔触れを無視し、リボーンが静かに笑う。

沢田綱吉の名を持つ教え子の死後、一度も負以外の感情を表に出すことがなかった筈の彼が。

「おやおや……まあ、『あの子』らしいと言ってしまえば、そうですが、ね」

“光”を喪い、再び絶望していた筈の骸もまた、穏やかな表情で。

どういうことだ、と他の守護者にとって激しい混乱を齎すには十分な効果を持っていた。

その様子に気付いたのだろう、リボーンはニイツと意地が悪そうな笑みを浮かべると、愛銃を懷に収めながらも、言葉を紡ぐ。

アイツが、とんでもねえ奇跡を起こしやがったんだ????????????????????と。

「僕は、最期の際にあった彼に頼まれ、六道輪廻を巡って得た力の

一部を分け与えたんですよ。彼が……綱吉君が、生まれ変わるよ
うに、ね！」

骸の言葉が、彼らの耳に届いた瞬間。

誰からともなく、ボンゴレの屋敷がある方向へと駆け出していた。

その数時間後、倒れ込むようにボンゴレの屋敷に飛び込んだ彼らの視界に琥珀の子供が入る。

「お帰り……それから、皆を置いて逝ってしまったてゴメン。これからも、一緒に居られるよ？　またオレが此処に戻って来られたから、ね？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？」

※もう1つの始まり

その子供は、間違いなく『沢田綱吉』だった。

約8年間を遡って生まれ変わったが故に、今はボンゴレの傍流に血を汲む8歳の子供で。

リボン達が、アルコバレーノ達が日本の孤児院まで迎えに来てくれたのだ、と幼い『彼』が嬉しそうに微笑んで告げる。

また、会えて嬉しい、と。

「オレもね まさか8年前に生まれ変わるとは思わなかったから、びっくりしたんだよ。でも、良いんだ……そんなに長く皆を悲しませずいられて、本当に良かった」

ただいま、と謳うように笑って声を張り上げた子供に、誰もが泣き笑いの表情で告げる。

お帰り……そして、ありがとう……我らが
大空、と。

ああ、大空が、世界が、ボンゴレ？世が、小さくも大きい貝の王が、還って来てくれた！！

“以前”よりも幼く小さく、それでいて“以前”と変わらない容貌と大空としての“資質”は何一つ、喪われず。

けれども、“以前”と比べると、無力な子供として。

だが、それが何になるのか。

彼を世界の王として戴き、自ら喜んで膝を折った守護者達にとって、呪われた虹達にとって。

何よりも、何を差し置いてでも、重視されるべきことは、大空であり、世界を統べる帝王でもある彼が在り続けることなのだから。

それ以外の事柄など、重要な事柄でもない。

どうして、彼以外の事柄に目を向けられようか！

もう、手放さない、『あの時』と同じようなことなど赦しておけるものか!!

※大空の再来

????????????????????????????????8年後の
イタリア、ボンゴレ本部にて。

「久し振りだな、リボーン!! なあ、挨拶云々よりも聞きたいんだが……世代交代が行われると風の便りで聞いたんだけどよ、本当なのか?」

かつての教え子に問い掛けられたリボーンは静かに、けれど、不敵に笑う。

最初で最後の最高傑作と謳われ、最早、生み出せないだろう、見事すぎる程の才能を咲かせた教え子の舞台が、これから執り行われようとしている。

「何を言ってるんだ? ザンザスは? 世じゃねえよ、あくまでも代理に過ぎないんだぞ」

なら、と身を乗り出すかのように、ディーノが急き込む。

「また返り咲くんだな! ? 今度は、? 世として、? 世の生まれ変わりとして! !」

かつて消え去った筈の、大空。

その大空が帰還したという知らせが齎された時は、マフィア界の隅々までが歓喜の声で揺れる程に凄まじかった。

「ああ、ツナヨシ!! ボンゴレとして、このマフィア界に再君臨する」

後に、ボンゴレの歴史は?????????????
伝説を語る。

ボンゴレ歴代最優秀と謳われ、慈悲深きドン・ボンゴレで在り続けたと言われる？世と？世は同一人物であり、2世代に渡ってマフィア界の帝王として、玉座に君臨した。

アルコバレーノ全員をファミリーに加え、誰よりもファミリーに愛されて慕われた、大空。

それ以後のボンゴレは、彼の死と共に解体されるも、彼の遺志に従ってマフィア界の監視役としての役割を担っていくこととなる。

また、彼は原因不明の病を患うも、苦痛を感じることはなかったのか、静かに心安らかな顔で守護者やアルコバレーノを含めたファミリーの人間に見守られて逝ったという。

※全ての終わり

ああ、今度は安らかに逝けるのか。

沢田綱吉の表情は、『あの時』とは正反対で、何処たりとも苦痛の色が見当たらない。

「また……オレが先に、逝くみたいだね……ねえ、皆……？オレはね、本当に幸せだったよ」

気が狂いそうな程に白いシートの中に埋もれたまま、彼が心底から

嬉しそうに笑って、言葉を紡いだ。

もう自分達も歳を取り、彼もまた、『あの時』よりも歳を取っている。

それでも、自分達よりも遥かに、彼の方が若いのだが。

「ずっと皆と一緒に居られた……」以前よりも、長く同じ場所でも過ごせた」

ああ、そうだ。

確かに自分達は、一時は大空を喪い、色を消した世界に絶望し、憎悪すら抱いた。

“死”という別れは苦しく、いつになっても受け入れ難い。

けれども、今は静かに受け入れよう。

「先に逝って来るね……お土産話、楽しみにしてるよ。ボンゴレの解体……お願い、ね……」

『あの時』と違って、誰かに殺された訳ではなく、本当に静かで、決して受け入れられないというような“死”でもないから。

敢えて受け入れよう……だが、これだけは譲れない。

託された役割を、成し遂げるべきことを果たし終えた、その時は。

躊躇うこともなく、大空の元へ逝く為だけに、この生命を絶つだろ

う。

諦めてしまえ、大空という唯一の存在に囚われたのだ……逃がすものか、覚悟するが良い!!

(……嬉しいと思うオレも重病か……心配しなくても、ずっと皆が来るまで待ち続けるよ)

E
N
D

(後書き)

初めまして、ハグと申します。

ちなみに初作品です。お目汚しですみません！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5757p/>

家庭教師リボーン 未来編～IF～

2011年1月2日18時29分発行